

獣と花、日常と混沌、家

東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻

学籍番号 3222357

楊藝妮/YANG YINI

獣と花、日常と混沌、家

要旨：

一年次制作の『白髪魔女と黒髪魔女』という作品と、自身の他の作品を参考に、「動物と花」「日常と混沌」「家」という三つの視点から論じる。「動物と花」では、自分の内面における文明と野蛮の矛盾と、いかに平衡を取るよう努力するかを探る。「日常と混沌」では、自分とパートナーの関係や生活様式を探る。「家」では関係と多元家族の形式を探る。自身が譜系人士¹で、単親家庭で生まれた子どもであり、女性同性愛者であることを踏まえ、自分の日常経験と世界に対する感覚を中心に、自分の作品が同じような特徴を持つ人々の声を代弁できることを望み、世界や自然の生命がより多様な方向に発展し進化することを希望し、自分もより多くの人々と世界と共存できることを願っている。

キーワード：

獣と花、文明と野蛮、隠される、進化、日常と混沌、LGBT、胎盤、花、愛と関係、多様化する家族

¹ 「譜系人士」とは、生まれた時から譜系が揃っていない人のことを指す。この言葉は、遺伝性の疾患や障害が原因で生理的または心理的な問題を引き起こすことを描写するために使われる。

1. 序論

修士一年次作品『白髪魔女と黒髪魔女』は、二人の女性の間の愛情の物語である。白髪魔女と黒髪魔女は、自分が作った劇団の5人グループの中の2人である。ひとりには年上で、もうひとは若い女性である。京劇の生旦浄末丑における、老旦と旦角のような。

数年前、よく突然赤い水の入った巨大な球の中にいると感ずることがあった。どうやっても出られない。時々、異なる目で世界を見ると、みんなさまざまな胎児で、赤い水の中で自分たちのやり方で浮かんでいる。白髪魔女と黒髪魔女は、その中の2つの胎児である。物語はこの空間から始まり、この空間で終わる。

以下では、本作の創作プロセス中に私が世界について考え、混乱したこと、自己の感情を探ることを記録することが主になる。そのことについて「獣と花」「日常と混沌」「家」という三つの部分に分けて論じる。

1-1. 獣と花

私は自分の内心や経験をもとに、獣と花を創作した。その中で、獣は野生的で、馴化されていない、破壊的な部分を表している。花は安定したバランスであるが、脆弱な部分を表している。

ある日友達と人間性について話していたとき、彼女は人間性が本質的に悪であり、人間の複雑さを好むと言った。私は野生で未馴化された人間と完璧な文明の人間を好み、人間の中間の人間を恐れると言った。Elizabeth Grosz の著作『Time travels -Feminism, Nature, Power』を読んだ後、その中の「野生で未馴化された」状態と「最終的な理想」の間には、進化プロセスの中にあるものではないのか、そのスタート前と最終完成結果だけを好み、プロセスを嫌うのではないかと気づいた。また、プロセスを排除して「完成」や「進化」を求めるような欲望は、自然進化の動力でもあるのではないかと思わされた。

花と獣は異なり、獣は常に馴化されようと抗い、花は根茎から生え、代々続いている。すべての花は同じ根茎に存在し、過去は消えていくが、未来はまだ続いている。また、私の絵において、花は制御力を持ち、獣を同化して花の頭をもたせることができる。

他人の痛みを見ると、花は次のように言う。

「同種」の範囲と「共感」の範囲はどのくらいに拡大すべきなのか、一生を通して自分が引き起こす痛みを減らすよう努力し、一生を通して贖罪することをするべきなのか。考えないで簡単な快樂を得ることができる。いつ「同種」と「異種」を区別しなくなるのか。あるいは単に自分を大自然の一環として、時間と空間の一つの小さな齒車として、すべての生命が異種ではなく、苦しみも自分の外にあるものではなく、自分の苦しみも自分の中にだけあるものではないと考えるのか。「私」を消すんだ。

しかし獣は「他者の痛みと自分の痛みを感じたとき、私は何かを殺したいと思う」と言う。

ときどき、文明と野蛮、自分はどちらに傾いているかわからず、どれだけ文明的で、どれだけ野蛮な部分を持っているかわからないと疑問を持つ。迷いの中で、内心にある文明への渴望は野蛮な部分を破壊しようとするが、自己否定と続く苦しみをもたらす。また、私の心の中の野蛮な部分は、馴化に抗い続け、文明を壊す意欲を持っている。それは、ある水面を刺して、安定した状態や架構を打ち壊そうとする。ブロックの下に埋められた野生の動物のようだ。

内心の文明と野蛮のバランスを取ろうとする過程を、二つの出来事が手伝った。そのうちの一つは、2022年11月の「シロイチの抗議運動」である²。

「シロイチの抗議運動」というのは、新型コロナウイルス感染症の期間中、私の出身国の支配者が国民の意志や感染症の現実状況を見做し、国家の緊急事態を延長し続け、3年間、新型コロナを理由に国民の個人的自由が時折管制され、「日常生活」を失った状況である。人々は核酸検査を繰り返し受けなければならず、「隔離室」に入ることを拒否する権利がなく、一部の権力が検査や隔離を行う人の手に掌握され、暴力事件や人身傷害が起きることもある。言論自由や生命の安全が継続的に保障されない状況の中で、ウルムチの火災が引火点となり、マスコミ学校の学生をスタートとして、人々は抗議デモを開始した。この抗議では、人々は白い紙を持って手を上げ、自分たちの強制された沈黙を表している。日本でも一部の人々が自発的にデモを組織し、ウルムチの火災を哀悼しながら、中国国内の運動を支援することもあった。

² 2022年11月の「シロイチの抗議運動」 <https://zh.m.wikipedia.org/zh/反對動態清零政策運動>

周りの人たちとともに、二回のデモに参加した。2回目のデモで、この小さな場所には、さまざまな目的の人々や団体が集まっていることに気づいた。地下に隠れているようであり、または地下に押し込まれたような生物のように、一つの出口から頭を出し、短時間だけ日光の下に来る。私もそのようだったかもしれない。私と同伴は場所を歩き回り、単純に白紙を持っている人、独裁者を皮肉ったり呪ったりする人、自由と民主主義を求める人、新疆の状況を問題にする人、大蜀民国旗を持っている人、LGBTを問題にする人、家父長制を打ち倒す人を見た。中国の環境では、これらは権威の対立面に立っていて、暗闇の中に隠された集団である。たとえば、LGBTを支持している中国留学生や、家父長制に反対する中国留学生は、日本ではより多くの機会を持って集会に参加して主張をすることができるが、中国では法律や社会世論の支持を受けることが困難で、常に隠された状態にあるのだ。

承認されない、隠されたものは暗闇の中で、行動は承認されない暴力となる。それらは陰影の中で交流し、境界を衝突し、口を開けると飛び出し、陽光の下で叫んでいる。

闇の中のすべての物質の正しさを評価できない。自分自身が関わることで共感することしかできない。そして、闇の中の群衆も互いに戦いや傷害をすることがある。しかし、闇や暴力の存在は変化をもたらす。光と闇の境界や未知は固定的ではなく、世界は生命全体として常に進化し、方向は未知であるが、常に進化している。

もう一つの出来事は、南カリフォルニアの学生とのゲームのコラボレーションである。

アメリカに初めて訪れた際、文化的衝撃を受けた。アメリカの社会は日本よりも複雑であり、文明と野蛮が混在している。日本で生活する時間で、野蛮さに対処する方法を忘れてしまっていたが、中国での経験の記憶を思い出すことで、そうした状況に対処する方法が思い出された。

一番強く印象に残ったのは、文明と野蛮が同じスペースに同時に存在することであった。学校のコーヒーテーブルで話している学生の隣には、独り言を言いながらゴミを選んでいる浮浪者がいた。豪華なショッピングストリートの横では、人々が小ばかに扮して生計を維持するために手段を尽くしていた。同じスペースでも、その中にいる異なるグループにとっては、まったく異なる体験であった。

数日間の生活を体験した後、ゲームのコラボレーションが始まった。ゲームのプランの最初のテーマは、危機の後に、主人公が闇に陥った人々を助けることから始まるが、自分を飲み込む人があることを発見した時には、主人公は助けることを放棄し、セルフケアを

行わなければならない。しかし、ゲームの議論中、闇のキャラクターに多すぎる注意を払い、それが正当に扱われることを望み、異化されることを望まなかった。議論のプロセスを重ねるうちに、チームリーダーからリードされて、心の奥に隠していた主張をゆっくりと語り出した。闇の一部分は、憤慨や恐怖を思い起こさせ、暴力や破壊を意味する。それは隠されるが、安定を揺るがし、変革を促す力としても必要不可欠である。光も闇を見て、その存在を認めることができると思う。それは常に隠される必要があるかもしれないが、それが見えるようにしたいと願う。ゲームのプランでは、共通認識を達成し、妥協することになったが、自身の心においては、花と獣が共存し、それらのバランスをとる方法を見つけることができるようになった。

1-2. 日常と混沌

『白髪の魔女と黒髪の魔女』の物語に戻る。

故事の中で昼と夜を分けているように、日常と混沌を分けた。光照りの下の可視の世界、つまり日常の「目」で見ることができる世界と、夜には見るできない世界を区別している。太陽の毎日の「冥界」の旅を比喻することで、これを表す。

黒髪の魔女は、白髪の魔女を物理的に「殺す」ことで、一緒に混沌の世界へ沈んでいく。混沌の世界への入り口は、子宮のような形状に設計し、生前の世界へ死を通じて戻ることを表現しようとした。

これまでの作品では、死んだ後、生まれる前の世界をよく幻想していた。そこは混沌であり、善悪の概念がなく、物質や時間の概念もなく、言語の概念もなく、さらに性別や種族の概念もない。自分の感覚に近いものを現実の世界で表現するには、暗闇の中の火の海を想像する。これは非日常の部分である。伴侶と一緒に暮らすことで、この部分に対する新しい感覚を得た。女性権利の互助グループに参加した。ある日、メンバーたちが自分が辛い時間を乗り越える方法の経験をシェアすると、彼らのうちのいくつかは私と同じように譜系人であり、いく人かは被害を受け、心理的トラウマを残していた。

彼女：私の個人的経験では、自分に安全な空間を作ることが大切です。例えば、気分が悪いときはオリジナルサウンドトラックを聴くようにしたり、特定の音楽を流すこともあります。

別のメンバー：私の現在の healing therapy は、椎名林檎の『ksk』アルバムをただただ聴くことです。

私：私はダメです、待たねばならないのです。自分の一部が囚われたり、眠っているように感じるのです。発作中の自分ももうすぐこの自分が消え、別の自分に戻ることを知っています。毎回、この自分がもう戻らないかもしれないと心配するのですが、毎回最後には戻ってきます。その間に何をしても効果がなく、外に人が待っていることで時間を短縮できることはわかっています。

彼女：私たちはよく傷つけあっていますが、しゃべらないように努めています。

私：まあまあですよ。私にとっては、どうなっても降り注ぐ夜が過ぎると朝に戻って、日常に戻る事なのです。

そのときに気づいたのだが、「日常」というのは私にとっては、暗闇が過ぎ去った明け方のことだ。暗闇の中で、何かによって傷つけられたり、内面で苦しめられると感るし、そのために戦う気力も生まれる。現状を変えることを願っている。

彼女との様々な思い出を思い出す。初めて出会ったときに、お互いの攻撃を隠すようにしたり、相手の攻撃のパターンをよく理解したり、経験や感情を共有して同じ場所に入るようになった。

これらの経験も白髪の魔女と黒髪の魔女で表現する。彼女たちが混沌や暗闇の世界に入ったとき、彼女たちは悪夢のような場面をさまよいます。例えば、巨大で高く伸びる陽具の形をした山や、山には陽具を握りしめた無頭の身体がたくさん生えており、山自体も巨大なサボテンのように見える。頭を垂れて顔が常に融けている花が頭を振る。互いに對方を刺す独角獣。

この場所では、白髪の魔女と黒髪の魔女は続けて戦わなければならない。最終的に明るい朝を迎えることができる。

昼とは最も好きな日常である。この部分は「獣」と「花」の「花」の部分により似ている。物語の中で、黒髪の魔女は白髪の魔女の体から生まれた。この世界に降り立つ前に、白髪の魔女は元々同じ胎盤に育った2人の胎児のひとりだった。降り立った後、彼女は胎

盤にいるもう1人の胎児を探す、どうやっても見つからない。そのため、彼女は自身の体から黒髪の魔女を生み出す。彼女たちは一緒に生活し、世界を体験し始める。彼女たちは一緒に料理をし、生物を飼育し、外界と交流し、生命を維持することをすべてする。

私にとって、正に昼のために、暗闇が存在する。そのために戦うのだ。「獣と花」の中で言われているように、闇は変革をもたらす。私とパートナーやその他のパートナーたちは、苦しみを経験し、それが社会との関係であることを探っている。悲しみや怒りなどの感情は、人々が現実を変える力やある種の結びつきを生み出す。同じ苦しみから集まる人々は、闇の中でゆっくりと秩序を作り、運動を始める。変革がすぐに起きるとは限らず、また温和であるとも限りませんが、混沌の中で続く反逆と闘争があったからこそ、現実や日常が少し変わることができるのだ。

例えば、日本では1896年の法律で同性間の性行為は禁止されていた。2013年に日本政府が「性的差別排除法」を制定し、職業差別を禁止することになったが、性的指向に対する差別は含まれていなかった。そして、2015年に日本政府は「同性カップル支援法」を批准し、同性カップルが結婚家庭と同様の経済的および社会的支援を受けることを許可した。現在、同性間の性行為は合法なのだが、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーの人たちはまだ差別や排斥を受けている。一方、中国では、法律はLGBTグループの権利を保護しておらず、ゲイや変性手術は精神疾患とされており、医学界で正常な生理状態として認められていない。また、中国では、ほとんどの学校でLGBTのグループが学生団体を設立することを許さず、LGBTグループは就職市場でも大きな差別に直面している。

2021年の映画『Rebel Dykes』や2019年のアニメ『and then the bear』などは、苦しみ、ヒステリーを起こし、戦い、反抗し続ける人たちがいることを思い出させる。レズビアン現状は、持続的な運動の後に少し変化したけど、父権圧迫と子どもの権利は今も多くの人に苦痛を与えている。世界の暗い面は、私が思うに、永遠に消えることはない。自分の力を徐々に強め、暗いところをより正面から見て、入り込んで、日常にも戻ることができるようにしたいと思う。

本作はまだ制作途中だが、闇の世界では、より面白いインタラクティブな部分を増やしたいと思っている。それは、より夢のような封鎖された世界に近いからだ。アリス・イン・ワンダーランドのように、カラダのような入り口は、同時に船のようで、長い鏡のような。また、カラダのドアは水上にあり、白髪の女魔法使いがその中に沈む効果は、太陽

神ラーが冥界へ船を漕ぎ出すように、また、アリスが異界への鏡に沈むようにも見える。そして、夢には案内人が必要だ。アリスを導くウサギのように。本作では劇団の髑髏が登場し、精子のように人の頭をした「飛び頭種」が白髪の魔女使と黒髪の魔女に話すようにもする。この節では、観客に何かを解説したいと思いつつ、また観客自身が解釈しようとするようなものもある。夢のようなものだ。実際には、描いたあとで私自身が見て分かるようなものがたくさんある。

日常では、白髪の魔女と黒髪の魔女がそれぞれ自分たちの空間を持ち、その空間で明らかに彼女たちの経験、個性、特質が示される。彼女たちの日常の行動は、一緒に食事をする、一緒に何かを見ること、一緒に遊ぶこと、仕事をする、洗濯をすること、部屋を片付けることなどだ。美術や内容でこれらをより面白くすることが目的だ。たとえば、彼女たちが飼育しているペットが千手観蠅であるなど。実際には、彼女たちの日常の多くの遊びは千手観蠅を世話することでもあり、たたえに尿を食わせず、妊娠している千手観蠅が横になれるように揺籠を織ることだ。

1-3. 花

祖母は花を育てるのが好きで、母は花を描くのが好きで、毎日毎日牡丹を描いている。私は自分が彼らが育てた花だと思う。

父が浮気して以来、一夫一妻の小さい家族は分かれて、母は独り暮らしを始めた。私は数年間転々として、ようやく母の家に戻った。母は祖母と姉妹と友人から支えを受け、私を育て続けた。家族の女性たちの愛が彼女から私に伝わり、私の体の中の花の一部分に育ったのだ。私は大切な友人やパートナーからも、それぞれ育つ茎や葉と、彼女たちの後ろにある他の花たちを感じる。

愛と関係は私にとって植物の蔓のようだ。無限に伸びる蔓には、一つ一つの花が咲いており、これは私の内心における家と愛の原型である。どのような愛であれ、私は常にそれを家の感覚と一緒に感じる。しかし、伝統的な小さな家族の形式は許容しない。私が許容する原型では、家は延長して開放的だ。花を柵で囲むことは望まない。蔓だけでつながっていることを望む。たぶん、同じ蔓に育つかもしれない。それらが離れている場合であっても、それらが数世代も離れている場合であっても、ある種の関係があるかもしれない。たぶん、異なる蔓から生まれるかもしれないが、某時空で交わるかもしれない。または、さらに前に遡って、それらはまた同じ蔓から生まれるかもしれない。

このような愛は私に繋がり of 安全感を与え自由を感じさせる。そのため、白髪 of 魔女と黒髪 of 魔女 of 関係は、人間社会 of 伝統的な恋愛や家族関係よりも、より多くの植物 of 関係を描写したいと思っている。彼らは同じ根を持ち、同じ胎盤から生まれ、彼らは相手の体から生まれた。彼らは共通点を持ちながら、異なる個体である。

私は、伝統的な家族や結婚関係を解体しようとする人がいるかどうかを検索した。「日本同性愛者連盟」「日本結婚自由促進協会」「日本多様家族促進協会」日本 of いくつか of 組織を見つけた。また、ノルウェーは 2020 年に婚姻制度を廃止し、合法同棲制度を導入した³。この世界では、多くの場所で、新しい生活様式を生命のために作ろうとする試みがされている。

論文『家族再考 多様化する家族と求められる支援』の中で、曾根原愛乃は「家族とは何か」を問いかけて探索する。近代において日本 of 伝統的な家族における様々な問題を分析し、どのような多様な家族 of 形態が社会問題を解決し、人々の生活をより良くするかを探っている。「母子家庭などの少数派 of 家族でなくとも、少子高齢化などの社会情勢の変化によって、家族に新たな『生きづらさ』が生まれているのではないか」といい、「恒久

³ ノルウェーの「合法同棲制度」は、2020 年に結婚制度が廃止された後に導入された新しい法的制度である、同性や異性 of カップルに法的保護を提供することを目的としている。

この制度は結婚制度と似ている点もある。例えば、カップル間には相互に約束する義務があり、財産を共有することができ、その一方が死亡した場合、もう一方が財産を継承する権利がある。しかし、合法同棲制度は結婚制度とも異なる点がある。例えば、合法同棲制度では、結婚制度 of 権利や義務 of いくつか（例えば子育て of 権利や義務）を継承できない。

⁴ Vogue 文化の中で、House とは新しい意味の「家族」である。このような組織が出現したのは、ニューヨーク of ハーレム地区 of 同性愛者やトランスジェンダーの人たちが、原祖家族から離れ、居場所を失っているため。House の存在は彼らに新しい居場所を提供する。ここでは、メンバーは互いに陪伴し、姉妹と呼び合い、リーダーは Father または Mother と呼ばれ、各家族には自分の姓氏（House Name）があり、通常はメンバー of 名前の後につく。

<https://wasavi.net/blog/vogue/vogueculture/>

的に続くとされた「家族」という集合体が、解体・多様化しつつあり、「家族のかたちが変わるにつれ、人々の『家族の在り方』に関しても意識が変容してきている」という。同時に *Vogue* の家族の形態に注目し、この種の家族では、血の繋がりによってつながっているのではなく、人々がつながっている。日本に来てから実際に交流している、例えば *Haus Von Schwarz*。例えば東京芸術大学の修士であり、同時にドラッグクイーンとして働くモチエちゃん。これもまた、未来に向けた多様化した家族型の進化だと考える。

個人的には、植物のモデルを使って、家族や愛に対する感受やヴィジョンを表現する。また、花と獣は日常を変える方法が異なる。獣は日常の影の中で、獣は痛みと叫びを続ける。花は日光の下に育ち、花は日常の一部だ。獣は秩序を崩すことを試み、花は継続して秩序を維持する。これらは異なる生命エネルギーだが、私にとっては、両方とも生命と自然の進化の様式だ。

3. 結論

最後に黒髪の魔女は白髪の魔女に彼女が夢で見たことを話す。赤い水の中で、たくさんの胎盤のついた胎児が浮かんでいて、彼女もその中にいる。彼女の胎盤のもう一方が白髪の魔女とつながっている。

譜系人士で、単親家庭の子どもである私は、この世界に向かって様々な困難を抱えている。自分がこの世界でどこに位置するのかを見つけ、自分の痛みを解決すると同時に、他人の痛みも解決するために、自分を様々な方法で表現し、自分の目に映る世界を表現しようとして、プロトタイプやシンボルを作っている。

この文章やアニメーション作品は、社会や生命に対して私が感じる様々な困惑、家族や友人、愛する人たちに対する小さな感情を、単に表現するだけである。これからも引き続きこの世界を探究していきたいと思う。

文献

- Grosz, Elizabeth. (2005). *Time travels—Feminism, Nature, Power*. Henan University Press.
- Patron, Agnès. (2019). *And Then The Bear*.

- Shanahan, Harri. (2021). Rebel Dykes.
- 曾根原 愛乃 (2016)「家族再考 多様化する家族と求められる支援 ―高齢者ケアを中心に―」 早稲田大学文化構想学部現代人間論系卒業研究論文。
http://www.f.waseda.jp/k_okabe/semi-theses/1612aino_sonehara.pdf

註